

小生個人にとっては、平穏な平成 21 年が明けた。思えば、平成 20 年は小生にとっても激動の年であった。日本戦略研究フォーラムの一員としての台湾地域安全保障シンポジウムへの参加決定とテーマの変更や馬英久政権の出現によるものと思われるが日程の変更等と台風の影響による日程の短縮があり、秋以降は統幕学校が部外委託した「国際平和維持活動にかかる調査研究」を受託した日本戦略研究フォーラムの特別研究員としてPKOに関する調査研究、特に2階の外国調査の実施、9月下旬から10月初旬の国連本部PKO局及びカナダにおけるPKO関連調査、12月上旬にはノーベル書授賞式の前日と言う忙しい時期におけるスウェーデンストックホルムにおける調査と顧問の職務をやや蔑ろにしながらの研究であった。

カナダ及びスウェーデンと言うPKO先進国の見聞を通じ、幾つかの所見を持ったが、その多くは研究報告書に反映させる予定であるが、所懐の幾つかを参考に供したい。

- ① PKOを国家戦略の重要な一部と位置づけている。
- ② 必要性等に関する国内の認識は基本的には一致している。
- ③ 所謂PKOセンターの位置付けが明確であって各国からの留学生等を受け入れている。
- ④ 軍人のみならず、所謂文民や警察官をも含めた教育訓練を行っている。これは最近のPKOが、統合任務(Integrated Mission)即ち多機能型のPKOが主体であり、それに応ずる必要性があるためである。
- ⑤ 日本もカンボジア以来10年を経て、逐次に人材やノウハウが蓄積されているはずであるが、それらを活かすう政治的な決断が為されていない現状に焦りにも似た感情を持たざるを得なかった。



(カナダ 10 ドル紙幣：停戦監視員の女性兵士、右：スウェーデン国際センターの教場)

防衛省自衛隊にとっても、2月のイージス艦愛宕の漁船との衝突事件、夏以降の田母神論文にかかる一連の騒動が、痛恨事である。インド洋における給油は辛うじて継続されることになったものの、日本の異質感を世界に扶植したに過ぎない。なんでも政局する棒政党の基本態度に疑義を感じざるを得ない。何はともあれ、イージス艦衝突事件も全面的に海自側の責任なのだろうか。田母神論文問題は、彼の想いと裏腹に政治的にマイナスに作用していることは疑いを入れない。そこまで考えての発表であったのか疑問なしとはしな

い。村山談話(同談話と同じく河野官房長官談話も自虐史観そのものであり、速やかに撤回すべきであると個人的には考えるものであるが・・・、彼の言う陰謀史観にも賛同する面が多々あるが・・・)を踏み絵にするような動きが防衛省改革の中に見られるのは悲しいことである。奇しくも今年には新大綱策定に向けて議論が加速する時期でもある。自衛官異質論が横行しそうな気配濃厚である。

また経済的にも1920年代後半の大恐慌以来ともいわれるサブプライム問題、リーマンショックと続く一連の動きからは、出口の見えない閉塞感が漂う。

年末以来、村上龍氏の「半島を出よ」を読書中であるが、日本人が如何に危機に対して無力であるか、ストックホルム症候群と言うべき性向を有しているという日本の国民性を鋭く抉っている問題の書であり、一読の価値があるだろう。

危機的状況下にあって明確な方向性を示しえない政治や政治家の矮小化、危機的状況を己の問題と認識していない能天気な国民性、マスコミや国民をリードすべき有識者の無力感、このような時代にあって、どう身を処すべきなのだろうか。

(了)